

## 虹

## 北欧の風に導かれ

## ①90 家出と自由とアンティーク



器を品定めする鍋島さん

デンマークの年越しは騒がしく、明るい。新年になった瞬間、そこかしこで花火が打ち上がる。路上も、公園も、川沿いも、カラフルな光と破裂音で包まれる。毎年けが人も出るほどの大騒ぎになる。

「街が一晩中戦場みたい。お正月は日本が恋しい」。射水市のアンティークバイヤー、鍋島 綾さん(38)は、そう言って笑う。

鍋島さんは昨年12月からデンマークに滞在している。2カ月かけて北欧の器を買付けのためだ。ランプや大皿など段ボール箱三つ分を既に手に入れた。北欧のアンティークは作家やブランド、年代によって雰囲気が変わるため、収集欲をくすぐる魅力がある。帰国まで現地の骨董品展や個人宅を丹念に回って買い集めるつもりだ。

この仕事を始めてから年に2回はデンマークに足を延ばす。いつの間にか、もう一つの故郷になった。しっかりこななかった人生を変えてくれた、揺るぎない原点である。

高校2年になろうとする春休み、突然家出した。登校日が近づくのが恐怖だった。級友とけんかしたわけでも、いじめに遭ったわけでもない。10代独特の同調圧力が息苦しかった。トイレに連れ立って行くような人付き合いが耐え難かった。書き置きを残し、特急と新幹線を乗り継いで東京へ向かった。学校行事で海外に行ったばかりだったから、数万円程度の現金はあった。上野公園をふらついていると、姉から「あなた、やってくれたね」とメールが届いた。

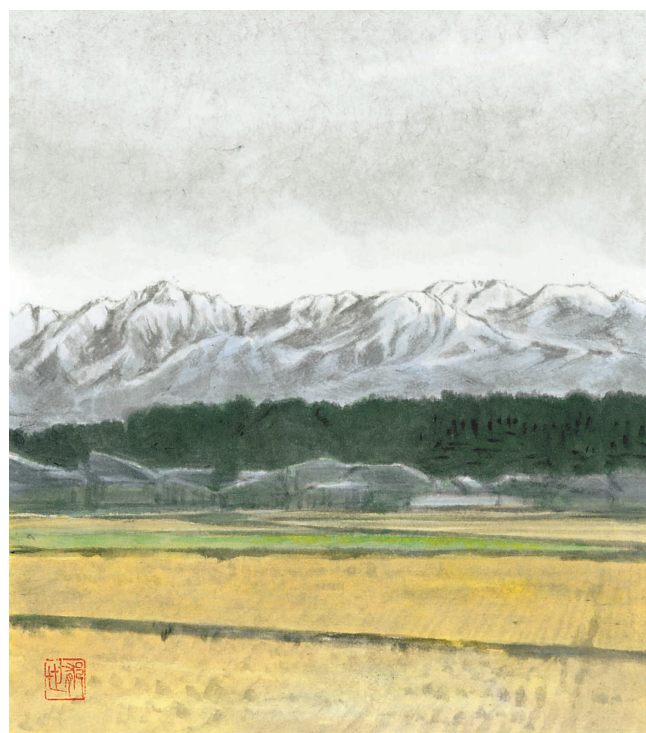
安ホテルにチェックインした。ベッドに腰を下ろし、緊張の糸がほどけた瞬間、不安が一気に押し寄せた。しばらくして親から電話がかかってきた。涙が出るほどホットした。東京まで両親が迎えに来て、1泊2日の家出劇の幕は下りた。書き置きは今も鍋島家の金庫にしまわれている。

ある日、母が本を貸してくれた。デンマークについての本だ。国名しか知らないが、ページを開いたら面白かった。自分の考えを育み、対話を通じ理解し合うことを尊重されるという。税金は高いが、医療も教育も無料。その仕組みにも憧れた。自由を支える骨格に見えたからだ。行きたくなった。日本で唯一デンマーク語を専攻できる大学の存在を知り、目指すことにした。高3夏の時点でセンター試験に必要な「生物」が9点という成績だったが、スイッチが入った。

努力の成果か、調子が良かったのか。本番の試験で懸案の生物は90点を超えた。無事に合格した大学ではデンマーク語だけでなく、文化や福祉、国際関係も幅広く学んだ。

3年時には大学の制度を利用し、デンマークに行った。しかし、憧れは忙しさに埋もれた。用意されたプログラムに追われるばかりで、記憶に残らない滞在だった。

就職活動に全敗し、やむなく大学院に進んだ。再度挑戦して京都の出版社に潜り込んだ。デンマークという存在を教えてくれた本を作った会社だ。面接では「私は本に救われた。そんな本を作る」と熱を込めた。しかし、配属先は営業部だった。社会人生活などそういうものと割り切ろうとしたが、セクハラまがいの飲み会や高圧的な上司がはびこる旧態依然とした職場環境だった。頑張れば編集者になれると自分を鼓舞したが、気力は尽きた。1年で退職届を書いた。



「春遠からし」 広田 都世

その後はアルバイトを転々とする場当たりの生活を送った。結婚や仕事で「普通の生活」を手に入れた友人をうらやましくも思った。悶々とした日々を過ごしていると、大学院時代の先輩からインドに誘われた。知人の結婚式に同行しないかという。興味半分て誘いに乗った。1週間ほどかけて続く派手なセレモニーは、歌と踊りが満載の Bollywood 映画のようだった。きらびやかであるが、落ち着かない。疲れが頂点に達した頃に会ったのが、デンマーク人の親子だった。忘れかけた言語で会話すると、異国で故郷の空気を吸った気分になった。再び、デンマークの存在が大きくなった。再訪を決断した。掛け持ちしたバイトを辞め、恋人とも別れた。29歳。ワーキングホリデー

ビザを申請できるぎりぎりの年齢だった。

外国人が子どものいる家庭に住み込んで、ベビーシッターをする制度を利用することにした。7歳の娘を育てるシングルファーザーの家に居候した。自由時間も多く、語学学校に通ったり、街を散策したりできた。大学時代の研修よりも、ずっとデンマークの空気を満喫できた。この国では、周囲の視線を気にせずに「自分は自分」と思える空気が当たり前になっていった。

好意の申し出でも「Nej tak! (いえ、ありがとう)」と断っても友情は壊れない。独身でも、性的マイノリティーでも関係ないし、離婚も珍しくない。夫婦は別れても子どもを暮らしの中心に置き、柔軟に協働している。個人の幸せと家族の形の柔軟性が両立しているのだ。「あなたはあなた」という意識が根付いている。そんな環境で暮らすうちに、日本にいた頃の息苦しさが嘘のように消えていった。「自分

た。土間は足の踏み場がないほど年季の入った品物であふれ、独特なおいがした。カチカチ鳴る掛け時計。鉄瓶から出る湯気。金継ぎをする祖父の手のしわ。すべてが好きだった。母もしばらく故郷の高山で古道具の店を構えていたことがある。古い物の価値をずっと感じていた。北欧と北陸の空が時間を越えてつながって見えた。「抵抗がない。嫌じゃない。全部、昔から自分の中であって眠っていたことだ」と気付いた。

帰国後、実家近くに倉庫を借りた。最初はフリマアプリで出品した。次に販売会を開いた。手応えを感じ、1年ほどしてオンラインショップを立ち上げた。ネットだけの商売などドライなものだろうと思っていたが、そうでもなかった。「これが日本で手に入って感激した」とお礼を言う人がいれば、部屋のコーディネートに合わせた写真を送ってくる人もいた。全員ではないが、体温を感じさせる客が画面の向こうにいる。

コロナ禍でデンマークに行けない間、エッセイを書いた。デンマークで体験した日々のあれこれをつづった。ダメ元で地元出版社、桂書房に持ち込むと、編集者が面白がってくれた。トントン拍子で出版されることになった。編集者に『北欧 モダンライフ』というそっけないタイトルを提案すると、却下された。『ゆるりと風に。ここは北欧』という詩的なタイトルが付けられ、書店に並んだ。デンマークに出会い、人生の方向性が決まったのは本のおかげだ。本の力で人生が動き出すことがあるのだ。「この本も昔の私みたいな子に届いたらいい」

執筆しながら、風通しのいいデンマークの精神も、アンティークの良さもずっと知っていたと再確認できた。その二つが今、心の真ん中でしっかり結び付いている。遠回りのような日々も必要な過程だったのだろう。「最初からうまくやっていたら、多分今の人生じゃない。ずっと息苦しく感じていたかもしれない」。平均的ではない生き方をどうこう言われても構わない。物差しは一つじゃないと、今は知っているから。

北欧と北陸は、しばしば比較されます。発酵食が生活に溶け込んでいること、曇天や雨が多い気候、日常の中に工芸やデザインが息づいていること。共通点を挙げていけばきりがありません。二つの土地を行き来し、鍋島さんは人生を切り開いてきました。鍋島さんのお話を伺っていると、デンマークの空気に触れてみたくになります。



## 「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えて』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50  
北日本新聞社西部本社「虹」係  
FAX 0766-25-7773  
mail niji@kitanippon.jp  
次回掲載は3月1日(土)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社  
メディアビジネス局